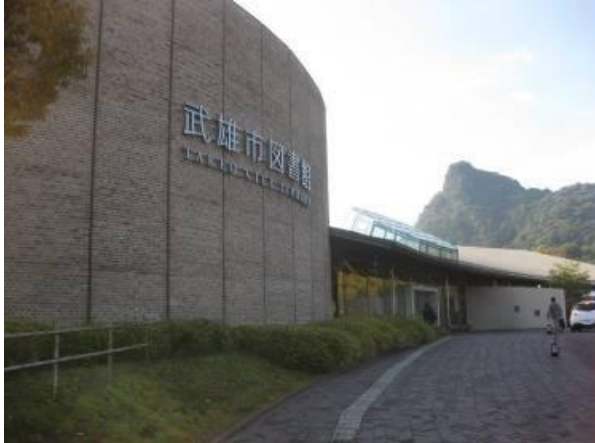


佐賀県の武雄市立図書館がマスコミでも関係者からも評価される記事が新聞をにぎわしています。静岡新聞にも識者の記事で2回も礼賛記事が掲載されました。

武雄市立図書館を「新しい時代のモデル」として評価する議員や関係者もいます。



私は図書館関連のMLにいくつか入っているので、地元の利用者や図書館で働く司書の専門家の立場からの発信もみていて、礼賛記事が独り歩きして追隨する自治体が結構出始めたのが気になっています。武雄市の樋渡市長はT S U T A Y A 経営の武雄市立図書館を全国モデルとして広めたいと公言していますので、1自治体での問題ではなくなっているのが現状です。

意見を述べる場合には自分の目で確かめた上で、自分の言動に責任を持ちたいと思っています。今回、11月23日に見学できてよかったです。しかも地元市民の方のお話を伺い、全国から集まった図書館関連の皆さんとの合同交流会と見学会だったので、複合視点で見られたので勉強になった見学でした。

まずは、地元市民の方から改修前の図書館と歴史資料館の映像を見せていただきました。静かなたたずまいの子どもにも高齢者にも居心地のいい図書館は、なぜ都会的な民営カフェ図書館になってしまったのでしょうか。武雄の図書館問題を考えるときに、大事なことは「何が生まれたのか」の前に「何が壊されたのか」を知ることだと思いました。

13年前に建設したばかりの基本を大切にしたい図書館と、蘭学に関わりのある価値ある資料が常設されていた歴史資料館が壊されたことにとっても驚きました。改修には市からも4億5千万円を投入したそうです。多額の税金が民間の1業者CCCに投入され、今後も指定管理料年間1.1億円が5年続くとのことです。

↓入ってすぐの左側にあった資料館はこのようなレンタルショップになりました。 ↓ダミーの背表紙



武雄蘭学関係をはじめとする貴重な資料は、どこにいったのでしょうか。隣のスペースも個人の絵のギャラリー展示場になっていたのが驚きました。「まさか・・・」の思いで「歴史資料館」の看板を何度も見直しました。

入館すると、壁いっぱいの本で埋め尽くされ、コーヒーの香りが流れている、都会的な知的空間がぱっと開けます。本の展示が工夫されているゆとりある空間で本の世界にいざなわれます。しかし、そこは全てTSUTAYA書店のもの。

入ってすぐの場所には工夫を凝らした書店の本が並んでいて、クリスマス本コーナーなど企画展示があり、本も上の天井までぎっしり並んでいました。

でも、上の棚はみんなダミー・・・つまり、金文字の偽の重厚な本の背表紙だけ。コーヒーショップでコーヒーを飲みながら書店の雑誌を読む・・・もちろん民間のお店では大事な客寄せコーナーです。しかし当然お金を払わなくてはなりません。ここで雑誌を販売することで、図書館に置く雑誌は極端に少なくなったそうです。しかも、雑誌のバックナンバーは、要求しても手にできにくいとか・・・。

スタバのあったところは今まで子どもの本のコーナーだったそうで、近くの巨木の祠をイメージした隠れ家みたいなお部屋もあったそうです。近くの保育園児は毎日のように通っていたそうです。それが今は、一番奥に押し込まれてしまいました。

新しいきらびやかな本が並ぶ書店とコーヒーショップを通り抜けないと子どもコーナーに行けないなんって！！

子どもはお金を払わないから儲けにならないということでしょうか。書店を通らなければおともも容易に図書館に行けません。その図書館との境界線も簡単には分かりません。高い閉架書庫のようなところが図書館部分です。そして見上げるほど高い棚が並ぶ2階が公共空間です。



↑書店スペースのゆとりに比べ、↓図書館スペースの窮屈さが気になりました。



(高いところの本を取ってもらうのに職員二人がはしごを持って来てくれました)

子どもの本が2階の高い書棚に移されていたのも驚きでした。子どもどころか大人も一人では取れません。本が選べません。職員は高いはしごで取ってくれるそうですが、その職員の姿も少なく声がかげづらい状況です。

今までは児童室のすぐ近くにあったトイレも、水回りが近いという理由でスタバのものになったそうです。4か所あったトイレは入り口近くの1か所になり、子どもは遠くまで行かなくてはなりません。



↑(雑誌は大人向きと子ども向きが混在)



↑(これが書店の児童書の棚です。)

図書館のコーナーとの違いに愕然。図書館の本は、並べ方もひどいです。低学年からヤングアダルト向きまでが、ごちゃまぜに並んでいます。いっしょに見学した司書さんが「私には本を探すことができない。この図書館では働けない」と言っていました。この職員も大変だと思います。



さらに驚いたのは子どものコーナー。細長いスペースがあるだけの夢も愛情も感じられない場所になっています。そのスペースの反対側にテレビが設置されていました。本を読むことを推奨すべき図書館でなぜ？ 職員に聞いたら「今の子どもたちはアニメが大好きでニーズが多いから」とのこと。読書推進する図書館での言葉とは思えません。

子どもの本のカウンターには職員がいなく、黄色いペンキで塗った鎖で、子どもがカウンターに入れないようにしてありました。カウンターの後ろの高い棚に大型絵本が箱に入ったままの状態です。10冊ほど置いてありました。

「大きい本は怪我をすると困るので直接手に触れさせない」のだそうです。

入ってすぐに市長の書いた本や武雄評価本が平置きしてありました。これは民間の書店だからできることでしょう。

公共の図書館では、特集企画を組むのにも、個人を顕彰するのにも、まずは、多方面の考えの本を並べるはず。公共は公平公正が求められるからです。ここは公共図書館ではなく、公設民営書店図書館だと思いました。

近隣の自治体から「1000円図書館」と言われているそうです。コーヒーを飲まなければスタバにすわれない。行けば本も買いたくなるからです。

公共の意義はお金がなくても、障害があっても、すべての人が恩恵を受けることができることではないでしょうか。



貸出カードにTポイントが付くことも問題だと思います。カードは自由選択制で規約を読み同意したうえでということにはなっているそうだが、CCC(TSUTAYA書店)が個人情報を使って分析しビジネスに活かしている会社だということも、結果的にそれに公が加担していることも懸念を抱きます。

駐車場には高級車が多いとも聞きました。近隣の若者やビジネスパーソンは確かに喜ぶでしょう。一時的には物珍しさでお客が増えると思います。でも、今までの利用者の行き場が心配です。高齢の方、子どもにとって入りにくい図書館になったことが、よくわかりました。話題になったので見学に来た私のような入館者が多いのだと思います。入館者の数は激増したけれど利用者の数と比例しないと伺いましたが、うなずけます。

TSUTAYAが自分のお金で商売することには何の問題もありません。地域も活性化することでしょう。でも税金が使われる公共事業です。1企業のために市長が東京で決めてきた手法にも問題があると思います。

同時期に伊万里図書館と指宿図書館も見てきましたが、全ての市民や利用者への誠意と愛情が感じられる図書館でした。武雄をモデルにと考えている自治体は、その違いを体感し、知ったうえで新たな施策を考えてほしいと切に思いました。近くの伊万里市民図書館、佐賀市立図書館、小郡市立図書館がおすすめです。小郡市立図書館は指定管理者運営を直営に戻した図書館です。

弱者や文化を大事にしてこそ、真の地域の発展になると思います。

「スピード感がある施策決定で、新しい公共空間」と絶賛されている図書館ですが、以上が私の実感と感想です。

公共の役割とは？ を考えさせられた図書館見学でした。見学会を企画実行して下さった関係の皆さんに心からお礼申し上げます。

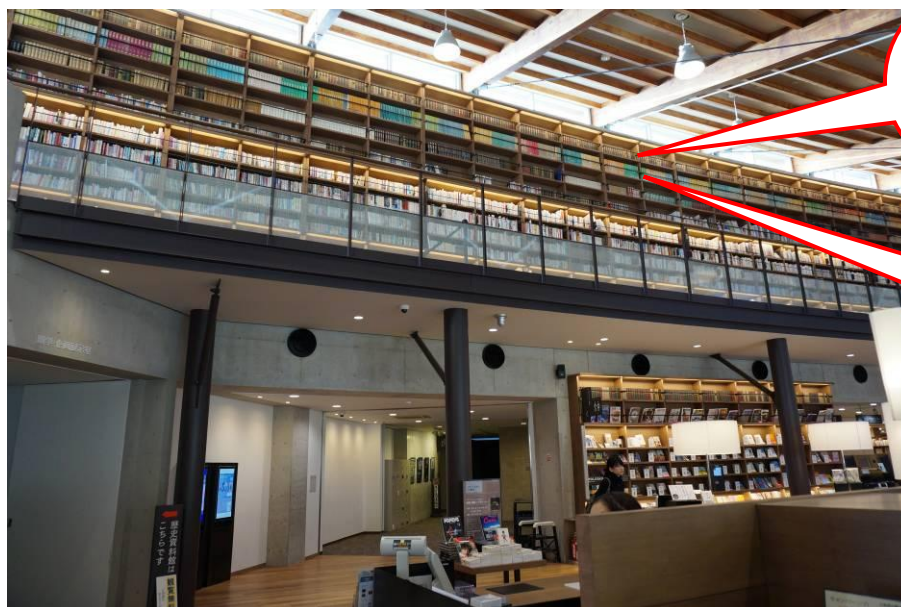
追記・・・記事に間違いがないかMLで地元の会の方、同行の皆様を確認しました。見学の日とTSUTAYAのスペルの間違い以外の内容について指摘はありませんでした。

武雄市図書館見学の概要については、草谷さんに記載して頂いたのですが、私は特に気になった点を記載する。

◆ 誰のための図書館か？ : 「TSUTAYA&スタバ」のため？

～図書館のミッションとは？～

武雄市図書館に入ると、2階の高い書棚まで的一見圧倒的な風景が広がる。しかし、何かが変？



ダミー本：

カバーのみ

新聞縮刷版



- ・ 2階上から2段目に並ぶ辞書群？ は全てダミー、図書ではなくただのカバー。「あれは飾りですか？」と職員に確認したら「飾りです」という答えが返ってきた。
- ・ 2階上から3段目に新聞全国紙縮刷版が横一列に際限もなく配架されている。使い勝手の悪いことこの上ないのは容易に想像できる。自分の手で取ることもできない。上段横1列に収まりきれない2冊については、書架最下段に「別置」してあった。

- ・ 2階書架前の通路の途中でロープが張られており、そこから向こう側に利用者は行くことができない。その書架にはダミー以外の本物の資料も配架されているが正面から見ることはできない。利用者がここの資料を利用することを図書館側が想定しているのかどうか疑問が残る。
- ・ (1F) 児童コーナーからトイレまでが非常に遠い。通常は、児童コーナー付近に子供用トイレを設けるべきである。小さい子供は間に合わない場合があるのではないだろうか。



気になる点は他にもいろいろあるが、これ以上列举しても草谷さん記載の「ためい記」の内容と重複するばかりである。私の記載内容は「ためい記」を乗り越して「ぼや記」としたい。

草谷さん記載の「ためい記」、又、そのほかにも多くの方の武雄市図書館の見学記を見ると、図書館を知るものにとって「ええ？」と思うような内容がどっと出てくる。でもこれは皆本当である。「百聞は一見に如かず」現地を見るとこれらのことが実感できる。

武雄市図書館を見学して私は、「誰のための図書館か？」「図書館のミッションとは？」ということが非常に気になった。ここで言う「ミッション」とは、図書館経営における使命・理念と理解していただければ幸いである。

「武雄市図書館は、『TSUTAYA&スタバ』のためにある」と思えてならない。逆に、そう思うと今まで感じていた疑問点が一挙に氷解する。

- ・ 2階上から2段目に並ぶ辞書群？ のダミーは、1階玄関付近からの眺めを見栄えよくするために飾ったもの（「配架」とは言えない）。新聞全国紙縮刷版が横一列に際限もなく配架されているのも同じ理由による。2階通路のロープ向こう側の資料が非常に利用しにくいのも同じ理由から。「利用者にとって」よりも、「玄関からの見てくれ」さえよければ関係ないのであろうか。
- ・ (旧) 児童コーナーを撤去してスタバを持ってきたのは、販売用図書とコーヒーの売り上げを伸ばすためか。玄関を入れてすぐ右側という一等地を児童コーナーのままにしておいてはあまりにももったいない、スタバを持ってきて売上を伸ばそう、ということなのだろう。児童にとってトイレ

が遠くなったことなど、本とコーヒーの売上には関係ないということなのだろうか？ 普通では考えられない発想だと思う。

玄関を入っての圧倒的な風景は、極めて作為的に構成されたもので、内容の伴わないまやかしである。この風景は、『TSUTAYA&スタバ』の売り上げを伸ばすために作られたものと思う。この風景はおろか、武雄市図書館そのものが「ダミー」のように思えてきた。

玄関を入っての圧倒的な風景に、「こんな図書館が欲しかった」などと言うのは早すぎる。実態をよく見て判断すれば、とてもこんな言葉は出てこないと思う。

日本でも高名な経済学者が、2度にわたり「写真で見る限り」の但し書きで静岡新聞に武雄市図書館を礼賛するような記事を掲載していた。経済モデルとしてはともかく、公共図書館としては惨憺たる内容なのであるから、公共図書館としても成功例というのであれば、少なくともご自分の目で実際に武雄市図書館を見てからにしてほしいと思う。



↑ エントランスから見れば「カフェ併設の町の書店」といった風情か？
ここを通らなければ、図書館コーナーには行き着けない。